

1 腎芽腫の免疫組織学的検討

○有田茂実 中山 茂
(千葉県こども病院 検査部病理科)

【目的】腎芽腫は形態学的に腫瘍性の後腎芽細胞(腎芽細胞), 上皮および間葉系の3成分からなり, これらが種々の割合で混合する腫瘍である。今回, 腎芽腫の細胞起源について免疫組織学的に検討したので報告する。

【対象】腎芽腫10症例(腎芽型8症例, 上皮型1症例, 間葉型1症例)。

【方法】各症例の腫瘍部ならびに非腫瘍部正常腎組織のパラフィン切片について, DAKO LSAB2 キット/HRP を用い, 免疫染色を実施し, 比較検討した。抗体は, cytokeratin(AE1/AE3), keratin, EMA, SMA, vimentin, desmin, CD56 (NCAM), CD57 (Leu7), S-100 の9種類を使用した。

【結果】腫瘍部において腎芽細胞は, 多くの細胞にCD56 (+) で, 時にEMA (+) やvimentin (+) の細胞もみられた。上皮細胞は, 尿細管様組織の殆どはcytokeratin (+) で, かつ多くはEMA (+), keratin (+) で, 正常腎組織の遠位側尿細管と染色態度が一致した。また糸球体様組織はvimentin (+), ボウマン嚢様組織はcytokeratin (+) vimentin (+) で, 正常腎糸球体と染色態度が一致した。間葉系成分の殆どはSMA (+) vimentin (+) で, 時にdesmin (+) の細胞もみられた。

【まとめ】免疫組織学的に, 腎芽細胞の多くはCD56 に陽性で, 一部上皮や間葉系への分化が示唆された。上皮細胞の多くは遠位尿細管もしくは集合管への分化が示唆された。間葉系成分は, 主に筋線維芽細胞や平滑筋の形質を示し, 時に横紋筋への分化が示唆された。

043-292-2111

2 平成17年度病理検査研究班精度管理報告

○福田憲一(千葉市立青葉病院) 大木昌二(千葉大学病院) 東 和彦(千葉大学大学院医学研究院腫瘍病理学) 井浦 宏(千葉市立青葉病院) 中山 茂(千葉県がんセンター) 西野武夫(千葉市立海浜病院) 宇野鉄也(総合病院国保旭中央病院) 中村和明((株)江東微生物研究所千葉支所) 五十嵐伸之(社会保険船橋中央病院) 小野寺清隆(帝京大学市原病院) 青柳正則(千葉社会保険病院)

【はじめに】病理検査研究班では, 染色の良否が問題ではなく適正処理を身に付けることを目標に精度管理事業を実施している。

【材料・方法】材料として, 15%緩衝ホルマリン固定された剖検例の肝臓を配布し, 各施設で通常の方法で包埋・薄切・染色を実施することとした。染色の種類は, 一般染色であるヘマトキシリン・エオジン染色及び特殊染色として, 膠原線維染色, PAS 染色, 細網線維染色を行うこととした。但し, 特殊染色においては, 自施設で行えるものとした。また, アンケート調査をおこない, 使用試薬, 染色方法, 採用試薬などについての情報を収集した。

【評価方法】評価は病理検査研修会にて参加者全員でおこなうこととしているが, 予備集計が必要なため, 各染色の作製標本を委員数名で鏡検し, 評価点を算出している。また, 各染色の総合評価として算出した評価点を基に, ABC の3段階評価を行っている。但し, 特殊染色においては目的物質の染色性の採点が不良な場合は, 他の項目の採点にかかわらずC評価としている。以上, 評価結果, 実際の染色態度等に考察を加えて報告する。

043-227-1131